

若者に夢を与える社会をつくる

坂中英徳

人類共同体社会の樹立を若者に託す

今日の日本に若者を奮い立たせるような国家目標はあるのだろうか。暗雲が漂う人口崩壊時代の不安を吹き飛ばす格好の目標がある。人類共同体国家の建設だ。

日本の明日を担う若者が移民と手を携えて人類永遠の課題の人類共同体社会の樹立に挑むのだ。若者にとってこれ以上のやりがいのある仕事はない。それは、若い世代が自らの手で自らの人生を切り開くものでもある。

人口ピラミッドがひっくり返る時代に生きる現在の30代以下の世代にとって、移民は新しい国づくりの同士だ。移民と力を合わせて未曾有の危機を乗り越えてほしい。

移民時代に生きる日本の若者の未来は、移民とどのような関係を築くかによって決定されると言っても過言ではない。

日本人が移民と良好な関係を結ぶには、民族の誇りを持って他の民族と付き合う心構えがなければならない。およそ自らの民族と文化に誇りを持たない国民は、異なる民族と文化に寛容になれないからだ。

どうすれば心の広い日本人が多数派の多民族共生社会をつくれるのか。以下に、移民に対する教育重視の移民政策をとるとともに日本人の少年少女に対する多民族共生教育を徹底することによって、日本の若者がどう変わるかを簡潔にする。

- 移民との異文化交流を体験することで若者は島国根性から脱皮し、地球人を目指す。
- 移民と親しく接することで日本人の誇りを取り戻す。異なる民族への寛容の心がはぐくまれる。その結果、民族の心と寛容の心を併せ持つ日本人が増える。
- 移民とのほだかの付き合いを通して、多種多様な人類は文化を共有する同じ人間であることを肌で知り、人類愛に目覚める。
- 移民の勤勉さに刺激され、移民と切磋琢磨する関係が生まれる。
- 移民との交際を通して異文化交流のノウハウを身につけ、世界に羽ばたく。
- 家族愛や祖国愛が強い移民の生き方を見て、改めて家族の絆や愛国心の大切さを学ぶ。

○ 移民との親交を深め、移民と結婚する日本人が増える。その結果、日本人と移民が共生する社会への道が開ける。

若者は多民族共同体の創造に挑戦する

入管の行政官として、退官後は移民政策研究所の所長として、様々な国籍の在日外国人と接した経験から、日本という小宇宙には外国人を日本にひきつけ、外国人を日本化させる不思議な力があると感じている。一体どのようにして日本は外国人をひきつける魔力を身につけたのだろうか。なぜ在日外国人は日本文化のとりこになるのだろうか。

日本は古来、「人の和」や「寛容の心」を重んじる精神風土をはぐくんできた。多神教の日本人の心の奥底には多様な価値観や存在を受け入れる「寛容」の遺伝子が脈々と受け継がれてきた。長い歴史を経て外国人を日本社会に溶け込ませる同化力がそなわったのではないかと考えている。

知り合いの在日外国人は、信義を守る日本人、もてなしの心がある日本人、穏やかな人柄の日本人に敬愛の念を持っている。四季があって変化に富む自然、美しい田園風景、まとまりのある社会、安寧秩序がよく保たれた社会を気に入っている。アニメもファッションも料理も大好きだという。

移民の二世以降の世代が日本の小中学校で学び、出身国や民族による差別のない社会で成長していけば、生まれ育った日本に愛着を覚え、日本人と心が解け合うだろうと見ている。さらに近未来には、人類共同体社会の樹立が視界に入ってくるだろうと想像をたくましくする。

最近、私の立てた移民国家構想についていろんな国籍の在日外国人と意見交換をしている。彼らは口をそろえて言う。「寛容の心がある日本人は移民を上手に受け入れる」「日本人と移民が協力して多民族共同体を創成するのも夢ではない」。

そして、私のいう人類共同体ビジョン、すなわち、人類の同一性を強調し、人類が一つになる地球共同体思想について熱烈的な支持を語る。在日外国人の世界で移民国家ジャパンへの待望論が高まっていると感じる。

移民政策は出生率の向上にひと役買う

あまり注目する人はいないが、日本の出生率を高めるのに効果的な政策がある。日本独自の人材育成型移民政策である。世界各国の青少年を日本の高等学校・大学に入れて教育し、立派な社会人に育てるものだ。副産物として、日本人の学生と外国人の学生とが共学し、良きライバルとして競い合って成長する関係が生まれる。

外国人教育重視の移民政策をとれば、入国時の移民の大半は10代・20代の留学生であるから、移民どうしの結婚はもとより、日本人と移民の結婚も多数にのぼると予想され

る。移民時代は国際結婚の時代である。

もともと人間は異なる民族への憧れの気持ちや好奇心を潜在的に持っているものである。特に日本の若い世代は、近年の国際結婚の増加傾向が示すとおり、民族や文化を異にする人びとに魅力を感じているようだ。外国人との結婚についても必ずしもいやというわけでもなさそうだ。

日本が移民大国になれば、移民と結婚する日本人が続出する時代がやって来るだろう。日本人と移民の結婚が増えれば、その二世が続々誕生し、年少人口の増加も望めるだろう。

以上のとおり、移民政策は出生者の増加につながる少子化対策としても有効である。政府は少子化対策の柱の一つに移民政策を位置づけてはどうか。国際結婚に好意的な見方をする人が少なくない日本社会にあっては、移民政策は出生率の向上にひと役買うと見ている。

先進国において出生率が2・00前後の比較的高い水準にあるのは、米国、英国、フランスなど移民大国ばかりである。それらの国でも白人の出生率は低迷が続いている。移民政策と出生率の向上との間には相関関係があると考えている。

平成の若者の奮闘と情報革命が日本を移民国家に導く

わたしは2013年4月から今日まで、一般社団法人移民政策研究所のホームページとフェイスブックで連日、移民政策論を展開している。この2年間(2013年4月から2015年3月)、坂中ブログに日課のように小論文を投稿してきた。その数の総計は500本を超える。フェイスブックの世界では、わたしの問題提起を受けて移民賛成派の人々の間で議論が白熱している。その結果、インターネットの世界で坂中英徳の名前と、「移民」「移民政策」「移民革命」「移民国家」「日本型移民政策」「移民1000万人構想」などの言葉があふれるようになった。

たとえば、2014年7月の移民政策研究所のホームページへの一日あたりのアクセス数が1万1000件にはね上がった。この驚異的な数字は若い世代が移民政策に期待を寄せていることの反映である。そのことに代表されるように、昨年中、若者の移民賛成の声は最先端の情報媒体を通して燎原の火のごとく広がったのではないか。その影響の大きさは計り知れないものがあったのではないか。

ちなみに、昨年末、日本最大級の動画サービス「nikoniko」は、ニコニコニュースに2014年(1月1日～12月16日)に配信されたニュースのコメントのランキングを発表した。それによると、坂中英徳移民政策研究所所長が訴える「移民開国論」(配信日：5月26日)のコメント数が3418件で第3位にランキングされた。

若者が先陣を切って移民国家の国民的議論の火ぶたが切って落とされたのは画期的なことである。新しい時代の幕開けを飾るにふさわしい。若者がインターネットを活用して日本の歴史を書き換えるのだ。将来の歴史家は、「平成の若者の奮闘と情報革命が日本を移民

国家に導いた」と評価するだろう。

時代は日本のビッグバンに向かって動き出した。移民革命を日本文明のルネサンスの嚆矢とし、それが引き金になって社会革命が起きるであろう。これは正真正銘の日本革命に発展するだろう。

移民国家創成塾

わたしは役人を辞めた2005年以来、日本と世界の若者をひきつける移民国家ビジョンを立案したいという思いから、日本百年の計を練ってきた。ここに完成した日本の未来構想が、超少子化と超高齢化の人口問題に移民立国で立ち向かい、教育重視の移民政策に基づき50年間で移民1000万人を計画的に入れるというものだ。

これは新しい国家の建設である。世界の最先端をゆく多民族融和型の国づくりを目ざす。日本の歴史はじまって以来の「人の開国」であり、明治維新以上の規模の革命に発展するであろう。

このような千年に一回の革命的大業は、幕末の吉田松陰、坂本龍馬の如き、20代・30代の革命家が活躍しなければ成就しない。移民国家の建国は若き精鋭たちの双肩にかかっている。

わたしは2010年7月、急がないと日本が危ないと直感し、若者が移民政策について議論を戦わせる道場である「移民国家創成塾」を開設した。これまで40回を超える勉強会を開催してきた。塾の卒業生は約50名を数える。

ところで、移民開国の是非をめぐる国民的議論がすでに始まったというのに移民政策の論客が不在の状況が続いている。私の好敵手がない。これでは議論が盛り上がらない。さてどうするか。

今すぐいい知恵は浮かばない。もう少し時間を貸してほしい。いま移民国家創成塾で移民国家の将来を担う人材を育成中である。多くの若者が熱心に勉強している。

移民国家創成塾で学んだ平成革命の志士たちが移民政策の専門家として活躍する時代は近いと感じる。

若者よ、移民国家の建国に立ち上がれ

司馬遼太郎は『竜馬がゆく』のなかで、坂本龍馬に、次のように言わせている。

〈仕事というものは、全部をやってはいけない。八分まででいい。八分までが困難の道である。あとの二分はたれでもできる。その二分は人にやらせて完成の功を譲ってしまう。それでなければ大事業というものはできない。〉

この言葉は私の今の心境を言い表している。かつ、それが移民国家建国の王道であると思う。

私がライフワークとして取り組んでいる移民国家の道は八合目まで来たと思う。人口崩壊の問題の重大性を指摘し、その最有力の解決策としての移民国家理論を完成させた。昨年10月に出た『新版 日本型移民国家への道』（東信堂）の発刊をもって私の理論構築の時代は終わった。

これからは世論と政治を動かす仕事に専念する。この二分の仕事は多士済々の人々の協力を得て成し遂げたい。

平成の若者が移民国家の建国に立ち上がるときがきた。古今東西を問わず歴史を動かすのは決まって未来のある若者たちだ。若者が新国家建設の主役を演じ、私が後方からそれを支える。そういう態勢を早く確立しないと平成維新は成らない。

わたしは移民政策研究のパイオニアとしての象徴的役割をはたす。責任を逃れるわけではない。仕事の力点を移民政策理論の構築からその啓発活動に移すということである。私が一歩引くことによって、坂中ドクトリンに共感する新進気鋭と各界の叡智が集結し、国家的事業の完成の早まることを期待する。